

大正八年

(二月)

一月一日 癸丑 水曜 晴。

朝五時起床。天地神祇を御宝前に拝し候。わか座敷にて、予、李子をはじめ、静子、広橋寿子、土井二人、井上、朝倉道子、木村氏、淑酒、雑煮を祝ふ、例の如し。午後、天候あしく、雨又雪。賀客、姉伯をはじめ、石山陽、橋岡久、宮内、玉枝。謡ひ初めもあり、大るに賑々し。外にも賀客大入りなり。酒井伯も。

*淑酒(椒酒)

一月二日 甲寅 木曜 晴。

朝より賀客賑々し。屠蘇、雑煮も昨の如し。

一月三日 乙卯 金曜 晴。

屠蘇、雑煮昨の如し。此日、檀上呼て庭にて一同撮影す。

(二月四日〜七日、記載ナシ)

一月八日 庚申 水曜 晴。

学校始業式。式場、校長始、職員、生徒一同参集。

第一 校長、勅語拝読

一一 斎藤氏、大東氏ニ替りて演舌あり、李子も。畢而福引、福釣あり。大賑々敷済たり。

後、昼食、職員一同済。

一月九日 辛酉 木曜 雨。

始て授業ス。午下四時半より、予、李子、弥生町堀田伯え行。加茂氏、酒井御夫婦、葉室

伯夫婦御出にて、本日ハ尺八の吹初にて、上原氏親子にて三弦、琴、尺八、先生もにて、御主人正恒伯実にたん能にかんし入たり。数番あり。妙さまの御琴もあり、面白く、殊に美食にて十時過帰。

*たん能 (堪能)

一月十日 壬戌 金曜 雨、又陰。

本日迄二年始状着、式百七枚名刺、百四十枚手紙、四百三十六端書、惣計七百八十三枚也。

一月十一日 癸亥 土曜 朝雨、後陰。

午前十一時より千駄ヶ谷田中氏へ行、午下六時帰。

五円券、田中氏え。

受信 名古屋や中村清より小為替金九円請取。

*名古屋 (名古屋)

一月十二日 甲子 日曜 陰。

来客、石井初子、鉄砲町百瀬七蔵細君、津田弘孝。李子、朝より御礼廻りをする。治子、

幾子、中野二行。

発信 名古屋 (屋) 中村え。日本弘道会え断。

*鉄砲町 (鉄砲町)

一月十三日 乙丑 月曜 晴、雨。 予記 武田氏。

課業例の如し。来客、岩崎富美、其母と御礼二来る。幾子、結納日も大東氏寒冒にて十五日に間に合ぬ様申来りて、此夕、斎藤氏、石山氏を呼て相談二及、愈十五日、石山氏、大東氏の代理にて決行之筈に相成たり。

受信 小為替金拾円、半年分月謝、中井みと。

*寒冒 (感冒)

一月十四日 丙寅 火曜 晴。

来客、川村彦三。

発信 石井初子、名古屋中井、兵庫佐々木静子え。

*名古屋(名古屋)

一月十五日 丁卯 水曜 晴。月如昼。

迹見幾子、後藤富司との結納執行。石山基威媒酌、大東氏の代理を勤む。余、李子、歌舞妓え招待される。安井中村より。

有難御江戸景清

烈女初子、仙台萩書替たるもの

義経千本桜、釣すしやの場

さくら時雨

寿曾我春駒

*釣すしやの場(瓶すしやの場)

一月十六日 戊辰 木曜 晴。満月鏡の如し。

課業例の如し。治子、幾子、大東氏、斎藤氏え御礼に行。

発信 酒井須磨子、結婚披露会断る。川崎静子え。

一月十七日 己巳 金曜 晴。

房州治子、いく子、九時出立。両国十時発汽車にて帰房す。

一月十八日 庚午 土曜 晴。

愛国婦人会新年会ニ。夕景、丹羽花子。

(一月十九日、記載ナシ)

一月二十日 壬申 月曜

課業例の如し。十二時、有地品之允告別会に参拝ス。

一月二十一日 癸酉 火曜

火曜稽古始をなす。

一月二十二日 甲戌 水曜 晴。

閑院宮、はし岡氏え。来客、丹羽花子、長谷川千賀子。朝鮮李太王、全く御危篤。

*はし岡氏（橋岡氏）

一月二十三日 乙亥 木曜 晴。

返事、石井氏、中村清、中井みと、秋元松子、美尾の、神代、小池平三郎、岡村尚子、藤井瑞枝。課業例の如し。泰来る。

*美尾の（美尾野）

（二月二十四日、記載なし）

一月二十五日 丁丑 土曜 雨。

泉会新年会執行ス。

学校ハ例の如く授業ス。午下一時より泉会新年会、雨にもかゝはらず集る会員八十余人。

食堂を式場とす。李子、開会の辞をのふ。細川風谷講演面白く二席、清鳳の女義太夫 坪（壺）坂之段、予の蘆刈笠の段 仕舞。畢而福引、福釣にて面白し。次に食事、弁松料理折詰御吸もの、大坂寿し、煮立の鴨南蛮そばとうとんにて御土産ハ大蛤。夜に入て済。特別員の方々跡に残られ、種々予の祝賀に付相談事あり。斎藤仁子、十一時迄。

*清鳳（清玉） *坪坂之段（壺坂の談）

（二月二十六日、記載ナシ）

一月二十七日 己卯 月曜 陰。

課業例の如し。午下三時より理事会執行ス。予の宅にて。原氏、島田氏、角田氏、橋本氏、増田氏、主事、石山氏来集。

協議案

校長ノ齡八十二達セラレタル祝賀之件

校長退隠、李子校長ニ襲職之件

学校設備之件

授業料之件、現在ハ三円五十銭を五円ニ、束脩ヲ五円ニ

第二銀行借入金五万八千円也、内三万五百円返済ス

晚餐をさし出して、八時頃退散。

(二月二十八日、二十九日、記載ナシ)

一月三十日 壬午 木曜 雨。

課業例の如し。午下五時より之筈、三時に開会ス。職員新年会。主事ヲ始め、斎藤氏、大塚、長尾、手柄、戸谷、女教員共廿五名、臨時、葉室伯も。上座敷にて余興、渡辺省三義太夫。下座敷にて食事、口取蟹甘酢、御吸もの、むしすし、鴨南蛮、煮大根、御飯、焼肴。福引ありて賑々し。九時頃めて度済。

一月三十一日 癸未 金曜 晴。

跡のかた付ものにていそかし。

(二月)

二月一日 甲申 土曜 雪。

さく夜よりの雪五寸位。課業例の如し。下婢松の父重病に付、其姉と共に帰国ス。

*さく夜(昨夜)

(二月二日、記載ナシ)

二月三日 丙戌 月曜 雪。 予記 武田氏。

昨夜よりの雪五寸にて。三日月よく拝したり。

二月四日 丁亥 火曜 雪。

昨夜よりの雪いやか上に積上たり。火曜日の稽古する。節分豆まきする。夜、小包物にて大賑々し。

いく子よりは書着にて九日出京。

*は書(端書)

二月五日 戊子 水曜 晴。

学校主事始、男職員七名も流行風にて休業二付、生徒に対し気の毒二付、明日六日より土曜日迄休業之事生徒え申渡し候。

小包物、京都、大坂、美濃等十軒え出す。李子、今夜九時発車にて京都え出立。橋岡え使出ス。

二月六日 己丑 木曜 晴。 予記 武田氏。

休校。来客、伊藤篤太郎博士、娘の入学願に。訃音、岩谷松蔵妻政子、四日死去。七日午後二時、青山梅窓院にて葬儀執行。

松平鞆子様え使出ス。

二月七日 庚寅 金曜 晴。

金曜稽古始をす。本日、京都にて万里小路幸子様御一周忌御勤の事。訃音、別府金七の妻とく子、五日死去。九日芝白金魚藍寺にて葬義。岩谷政子葬義、木村氏代理。高輪岩崎家静嘉堂秘籍志第四帙五冊御寄送相成、直に請書出ス。

受信 李子無事着、は書。

発信 殿橋浅田え。中井みとえ。美作山本正左衛門。高輪岩崎え。

*芝白金魚藍寺(芝白金魚藍寺)

*葬義(葬儀)

*葬義(葬儀)

*は書(

端書)

二月八日 辛卯 土曜 陰。

休校。朝十時頃より雪ふり出して、午下、三、四寸二及。四時頃、木々の雪払はせたり。夕景には一尺も積たり。大雪可驚。終日揮毫ものス。

二月九日 壬辰 日曜 晴。
朝、李子京都より帰着。

二月十日 癸巳 月曜 晴。
本日より学校授業始む。課業如例。房州より幾子着。大炊御門晨子、中野正子来る。予ハ田中氏ヲ訪ふて留守中。下婢松女父の病氣よろしき由にて本日帰着。

二月十一日 甲午 火曜 晴。

紀元節。憲法發布三十年。明治廿二年此節の過去を帰り見れば、姉小路公義卿外務大臣秘書館中病氣にて熱海樋口に静養中、予等見舞に行て、万里小路夫婦、裏松千代子、松野和邦夫婦、米倉一平氏、みな相摸やに寄て大く賑々敷、御腕廻しなど此時より始まる。其節憲法發布式ニ付、陛下上野行幸ニ付、わか生徒等も御奉迎申上る事に成て、火急熱海引上て、本日外務省辺にて待請ル事とス。わか父、生徒を引連られたり。和田倉辺の人浪にて命からく漸こ迄達したり。其節の人々大半死去致されたり。来客、後藤富司氏。

発信 角田氏、石井、秋元え。

*帰り見れば(顧みれば) *外務大臣(外務大臣)

二月十二日 乙未 水曜 晴。 予記 竹田氏。斎藤氏えも。

朝六時、李子、いく子、竹女を連て出発。両国七時半汽車にて房州行一泊。斎藤菊寿氏病氣ニ付、武田氏をたのみ治療を乞ふ。来客、横浜田中住江、妹入学ニ付面会ス。

二月十三日 丙申 木曜 晴。

課業例の如し。来客、横浜桃井可雄、細君と其始と面会す。李子と竹、夜十時廿分着の汽車にて帰。

*其始(其娘)

二月十四日 丁酉 金曜 春雨。

金曜稽古する。終日、春雨いとほそくとふりたり。

二月十五日 戊戌 土曜 晴。

朝、橋本太吉氏妻友子、流行寒冒にて昨朝死去のよし、角田氏よりしらせにて驚くまい事か。こんな惨々たる事ハとたゞくほう然たるのみ也。直ニ李子鎌倉へ行、夜十一時帰。黒田侯、香料五円。橋本氏、香料拾円。

*寒冒(感冒) *ほう然(呆然)

二月十六日 己亥 日曜 晴。

二月十七日 庚子 月曜 晴。

課業例の如し。午下三時過、治子、いく子、房州より帰来する。

二月十八日 辛丑 火曜 雨。

火曜の稽古する。藤浪長次郎より愛四郎十三回忌ニ付献香ありたり。朝、中野より寿子、鶴子来る。鶴子ハ午後津田へ行。予、堀田家ニ行、夕景帰宅。夕七時、後藤富司来る。治子に面会ス。雨しきり也。一昼夜ふりつゞく。

二月十九日 壬寅 水曜 晴。

高巖院愛四郎十三回忌。午下二時より光円寺に参詣する。読経もありて後、御供養ものも出る。中々賑々敷事也。天気晴朗にて春三月の如し。

受信 林有斐庵より色紙一枚着。

発信 浅草藤浪氏、帛紗小包にて。

二月二十日 癸卯 木曜 晴。

課業例の如し。房州迹見の借家をさがすのにて手分して夜迄も。房州治子、いく子、朝八時汽車にて帰房する。

二月二十一日 甲辰 金曜 晴。五時頃より雨ふる。

金曜稽古する。中野より正子来る。午下早々、田中氏へ行、夕景帰る。

二月二十二日 乙巳 土曜 雨。

課業例の如し。来客、角田栄子。

発信 三重県松阪楠井ふき、返却もの。

二月二十三日 丙午 日曜 晴。

二月二十四日 丁未 月曜 晴。

課業例の如し。本郷丸山新町十二番地借家、愈かり入之約定済ひたり。夜、予、李子、女中等を連て右家を見に行。実に不潔究りなし。家ハ新らしきに住人の乱ほうをいたしたりや。

*究りなし(極りなし) *乱ほう(乱暴)

二月二十五日 戊申 火曜 晴。

火曜稽古する。房州より治子、いく子帰。本郷の家に大工、表具やを遣して障子其外張替、下部、下女を遣して大掃除させる。

*表具や(表具屋)

二月二十六日 己酉 水曜 晴。

本日吉辰日ニ付、愈家移りいたし候。今夜、親子下女共一夜する。予、今川小路玉枝方へ行。素謡会。清水、浅野氏、基陽、棚はし、大八木氏、外に大石氏之娘も来る。十時帰。竹田氏、門野玉子、渡辺その女。此朝、房州より荷物着。直ニ本郷丸山の家運ふ。

*棚はし(棚橋)

二月二十七日 庚戌 木曜 晴。

課業例の如し。朝、斎藤菊寿氏来り、昨夜富司氏実家より電報にてチタシスと云、今朝一番にて帰国ス。李子、いく子連て芝へ行。竹田氏。夜、斎藤氏来る。伯父の死にて大めに安心々々。

二月二十八日 辛亥 金曜 晴。

金曜の稽古する。

発信 閑院様え。渡辺そのえ。

(三月)

三月一日 壬子 土曜 晴。60(度)。予記 富司、いく子の結婚。

課業例の如し。午下三時半より媒酌大東御夫婦入来、待居られたり。李子、朝より花嫁の極彩色満かん飾に忙殺せられたり。此時、治子、いく子、媒酌と共に自動車にて上野精養軒に行。予等ハつゝひて車にて行。直に長島式なる神前装飾見事に出来たり。伊邪奈妓命御神号二幅前にて神主二人、新夫婦着席。媒酌、親、及親戚ひかへたり。鄭重なる儀式、三々九度の杯事、親子、親戚の杯もめて度相済たり。後、六時より食堂開けたり。御客之分、万里伯、姉伯夫婦、大炊晨、富司方、先生、親友、兄弟三人、斎藤氏、高橋弘、井深、長尾氏、玉枝、泰夫婦、基威、廿八人也。宴席滞なく相済めてたし。新夫婦、此方え帰着して本郷新邸に入賀する。

*満かん飾(満艦飾) ー *長島式(永島式) ー *伊邪奈妓命(伊邪奈岐命) ー *めて度(目出度) ー *めてたし(目出たし) ー *入賀(入駕) ー *め

三月二日 癸丑 日曜 晴、風。

いく子、朝より仕舞拵らへして、新夫婦、斎藤氏、大東氏え御礼二行。来客、雨宮、斎藤仁子、夜十一時迄。

三月三日 甲寅 月曜 晴。

李王殿下御大葬二付一般休業。雛祭する。此日も新夫婦、姉小路伯、中野跡見え御礼二行。日晡帰て、夕餐を饗ス。来客、皇国会主依田光二氏、面晤す。李子も此会に賛成ス。

三月四日 乙卯 火曜 晴。

火曜稽古する。来客、大東氏。

三月五日 丙辰 水曜 晴。

試験絹本にかゝる。来客、大東氏細君、跡見玉枝。

発信 絹本横もの、三重津市堀川茂三え。

三月六日 丁巳 木曜 晴。

試験絹本にかゝる。来客、中野より正子。鈴木豊次郎え箱書附二箱渡す。

発信 福島五十嵐氏え絹本小物出。名古屋や中井みとえ。

*小物(小包物) *名古屋(名古屋)

三月七日 戊午 金曜 晴。

金曜稽古休て、生徒の卒業製作中。

三月八日 己未 土曜 晴。

生徒製作に忙殺する。

三月九日 庚申 日曜 雨、晴。

朝九時より九段能学堂二行。玉枝より誘れたり。観世鉄之丞別会催能。万三郎熊野にはか
んし入たり。六郎の小原御幸、是もよし。鉄之丞葵上、電灯ともらす暗かりにて葵上の出、
殊によろし。然し何も見えすて石橋も残して帰る。

*能学堂(能楽堂) *かんし入たり(感じ入たり) *ともらす(点らず) *
見えす(見えず)

三月十日 辛酉 月曜 晴。

本日にて試験の書画畢。

発信 上野関清吉え。名古屋や中村清、牛込石井初、すま藤田実子、名古屋や日比のふさ、三
井守之助氏えも。

*名古屋(名古屋) *すま(須磨) *名古屋(名古屋) *日比の(日比野)

三月十一日 壬戌 火曜 晴。

火曜稽古する。

発信 葉山大炊家政君え小包物。

三月十二日 癸亥 水曜 雨。

本日より学校試験はしまる。

発信 森律子え。

三月十三日 甲子 木曜

午後一時より教員総会議協会ス。予、此度退隱之事、李子襲名之事を申のへる。一同先賛成。

*会議(会議)

(三月十四日～十六日、記載ナシ)

三月十七日 戊辰 月曜 晴。

朝より角田氏を問ふへく電話かけたれと、午後二時頃よりと云事にて二時より出向る。竹冷君と長く閑談、俳くの事にも及びて種々面白く、又予の理想の衣服改良の小桂を見て大るに賛成、男子も着たくと申され、五時過迄咄して帰。

*俳く(俳句)

(三月十八日、記載ナシ)

三月十九日 庚午 水曜 晴。

正午より田中氏え行。五時過帰。彼岸之入り。

三月二十日 辛未 木曜 晴。

日々直し物にて忙殺する。来客も多し。午下四時頃、角田氏より電話にて、真平突然危篤

申来り、大ゐに驚き、予、李子、かけ付る。渡辺作氏之宅にて突然病、脳出血にていかんともいたし方なく終に死去せられたり。残念言可からず。此夜中に自宅へ移されたり。

(三月二十一日〜二十七日、記載ナシ)

三月二十八日 己卯 金曜 雨、後晴。

三月二十九日 庚辰 土曜 晴。

午後二時半より芝万里小路伯二行。此日は堀田伯、欧米優遊近日出立之赴二付、和慰会より送別会を催さる。余興に渡辺省三氏、乃木將軍先祖墓参之段、みな感涙にむせひたり。二枚折屏風一同合作面白し。食後大ゐに遊て十一時迄。

*優遊(漫遊) 一 *赴(趣) 一

三月三十日 辛巳 日曜 晴。

午下一時より九条様へ参る。恵子夫人に伝記題字願上る。種々御咄して帰。桜花五分の開花にて驚人たり。

三月三十一日 壬午 月曜 晴。

朝十時より、予、李子、静子と光田寺へ参詣。釈妙好中村糸女の廿七回忌二付、読経を頼みて法事執行ス。それより角田氏を問ふ。来二日二七日之問合せして、帰途、陛下、学修院へ行幸御還行之折柄、拝し奉りて有難しとも有かたし。東宮御同啓。帰宅後間もなく中村元嘉氏より電話にて、元嘉今朝死去のよし申来りて、又驚き、直に車をはせて行、直二元嘉氏に面会して、此驚き一方ならぬ事にて、只今御知らせハとなたてすかと申候へは、家内昨夜より変来りて、今朝五時何分死去致したると仰せにて、先々安心致し御暇乞もして帰。

夜、井深氏。人形師。宮村剛夫。本郷跡見夫婦。

*学修院(学習院) 一 *御還行(御還幸) 一

(四月)

四月一日 癸未 火曜 晴。

庭の桜も五分の開花。今年の花も見て嬉し。李子ハ朝より中野へ行。来客、伊藤歌子、予の画五幅箱書付頼まれたり。午下一時過、大炊御門家政氏より電話にて、千種典侍様より禁苑の御花見頃に候まゝ、四日午後二時頃より御参りのよし仰戴き、御請申上る。

東京府知事法学博士井上友一より、

私立跡見女学校設立者、財団法人私立跡見女学校理事跡見花蹊、大正八年三月六日付

申請、跡見李子ヲ其ノ校々長ト為スノ件、認可ス。

来客、井上角五郎夫人喜美子、宇多川幸次郎 娘ト、高津登久子 母ト、黒沢綾子、堀和敏子 母ト、山田富江、内藤つま子。

四月二日 甲申 水曜 晴。二日の月さへ渡り、よく拝む。

朝九時半より、予、李子と同行、本郷麟祥院に参詣ス。角田竹冷居士二七日二付、読経仏事十二時前済て、安田輝子の自動車にて三人同しく角田氏の宅にて昼の食事を饗せられる。五十人計婦人客也。三時頃より中村元嘉氏千鶴子の告別式ニ会ス。もはや出棺の跡なり。夜、土井早苗、田鶴子来る。十一時過迄。来客、宮崎糸子義兄弟。

受信 藤井瑞枝より、かつほり佃煮、味噌漬もの二曲。

*さへ(冴へ) *かつほり佃煮(鯉の佃煮)

四月三日 乙酉 木曜 晴。

神武天皇祭。所々の桜花満開なり。来客、中島徳蔵先生、榎崎宗重、東京日々新聞記者佐藤義雄、堤富美子。宮城千種御局え汲泉、外に御すもし二重、黒鯛椀。正親町鍾子様も御すもし二重さし上る。

受信 大坂天下茶屋より写真着。

発信 酒匂藤井瑞枝え小包もの出ス。

四月四日 丙戌 金曜 晴。

朝より空曇りたり。然し雲行ハよろし。宮城よりハ空をおあんし被遊て、午後二時を一時に参れと仰せられて十二時半出門ス。竹橋御門にハ迎ひの女中来りて待居たり。花松典侍様御局にて花松様御案内下されて禁苑の花を拝観す。空も晴渡りて風もなき長閑き春にて、花はけふを盛りと咲揃ひて花の全世界、かしこ所わたりハ九重の花の白雲、七重八重に浮出て、さながら極楽世界。女官様かたの御案内にて、元のつり橋ハこゝにて候也と申され、かしこ此処と拝観して御奥に参り、今日は后宮陛下拝謁仰せ付られとて、御座所まで、典侍、掌侍様御さし図下されて、はしめて拝謁ス。陛下には御機嫌うるはしう玉の御声を伺ひ、花蹊にはしばらく逢はんか相替らぬ元氣しやな、此度ハ校長退隠して李子に跡を譲ると云事、この明治のはしめ女子教育の事ハたれもとなへない時分より、率先して長々の間教育に従事して、其功勞ハ容易でない、御国の為に尽してくれたと仰せられ、只々感涙にむせふ計にて、御恩顔ほからかに仰せられ、又李子も小さい時より花蹊仕込にて此度其迹を續くと云、是も大ぬに安心也と仰せ戴き、古き事親らしき事御咄しあり。私の着せる衣ものを御覽して、それが花蹊工案の桂かと仰せられ、是に付て衣服改良の訳を申上。先々咄しをせよとて御とめに相成て、たゞ／＼恐れ入のみ也。いたゞきたる御綸子、是を桂にせよと仰せられたり。それより花蹊えとて銀製御紋章入の大御杯、白紋綸子一疋、御目錄一万疋、御人形、御袖入、御菓子御下賜相成て実今日こそ何たる日どや。御次の間にて御合のもの下さるとて結構々々なる御料理いたゞき、此時二位御局も御参りにて久々にて拝謁いたし昔し咄しに時を移し候。后陛下より画をかきてくれて御直に仰せいたゞき冥加にあまりし事、拝承いたし候。四時退出す。

*さし図 (差し図) *親らしき事 (新らしき事) *工案 (考案) *日どや (日どや) *かきてくれて (かきくれと)

四月五日 丁亥 土曜 陰、雨、また晴る。

此日朝より来客ありて、石井初子。国民新聞記者赤江時二云、昨日、宮内省にて銀杯拝領ニ付御咄しをと云。驚ニ入たり。昨日退出して誰人にも逢ぬにと云。わか新聞ハ宮内省に二人ツ、出して居り候ニ付と云。それから昨日の咄し申聞せたり。中野より泰来る。

発信 花松典侍様え昨日の御礼の文さし上る。

四月六日 戊子 日曜 陰。

朝より人形師二人来りてモデルになる。

受信 九条様より自伝の御書下される。大坂吉宗えいより祝哥短冊二枚着。

四月七日 己丑 月曜 晴。

朝より色紙、竹、又松の画揮毫ス。

四月八日 庚寅 火曜 晴。

正午より、予、李子和歌舞妓座二行。土井早苗、田鶴子よりの招待也。

杓手鳥孤城落月

研闇伝授の両刀 宮本無三四

修禅寺物語 伊豆夜叉王住家

実録先代萩

魚屋茶碗

奴道成寺

四月九日 辛卯 水曜

朝、宮原六之介夫婦来られて、今日ハ御師匠様の誕生日ニ付、是迄永年之間交誼を得たる事其恩に酬ゆる事もなく打過しつゝ、漸此度の八十の御賀に付聊ながら祝意を表する迄にとて、学校え金貳百円也、私え金百円也を寄附せられたり。午下三時頃より北条つね子様を問ふて五時頃帰。

四月十日 壬辰 木曜

朝より色紙ニ寿の字揮毫ス。

受信 大坂高原より扇子着。

発信 実業之日本社え校生三部出ス。

*校生（校正）

四月十一日 癸巳 金曜 晴。朝、晴天。午後、急に雨、あられも交る。後又空はれたり。

昭憲皇太后五年式祭二付、講堂に祭壇ニ皇靈代ヲ祭り神饌を供して、校長、名誉共、職員、生徒一同玉串を捧る。主事、皇太后の御逸事を演舌して式畢、生徒一同退出。李子校長襲職の挨拶之印迄に職員一同に昼飯を饗す。

*祭壇(祭壇)

四月十二日 甲午 土曜 晴。

午下二時、予、李子と築地精養軒に参集ス。毛利安子様、喜寿祝賀会執行。階上階下共八百人と云。余興、秋色桜 貞水、長唄石橋、三番叟、躍等にて食堂開ける。実に盛大無比也。

四月十三日 乙未 日曜 晴。

本日は、予、李子と朝十時より横浜原氏を問ふ。安子様のみにて昨年よりの咄しにて昼餐も呼れゆる〜といたし候処、宅より電話かゝりて靖子御暇乞に來り候二付すく帰りくれ様との事二付、早々帰京す。

四月十四日 丙申 月曜 晴。

始而五十生授業ス。午下早々、中野跡見え行。此度靖子縁談究り候二付、仕度もの大既揃候二付、みな〜目を通し候。立派々々に出来候て大〜満足いたし候。鶴子も神戸より山根氏の一周忌にて種々手伝居り候。五時過帰。

発信 御所花松典侍さまえ御返事申上候。大文庫、御文箱共返上いたし候。大坂高原え返事出ス。

*五十生(五年生)

*究り(決り)

*大既(大概)

四月十五日 丁酉 火曜 雨。

火曜稽古始める。夜五時より中島徳蔵君快気祝二付、燕楽軒二行。來客、横浜石川細君。

四月十六日 戊戌 水曜 陰。予記 竹田氏。

來客、三宅たつ子、和歌の教師を連來る。

四月十七日 己亥 木曜 陰。

終日揮毫ものス。北条つね子さまえ使出ス。

四月十八日 金曜 庚子 晴。 予記 竹田氏。

午前九時より上野美術協会へ行。本日、皇后陛下行啓ニ付拝謁。正午、蓄産博覧会御覽済にて、此会え成らせられる。玄関前にて一同拝謁、御弁殿ニ而午餐済せられ、予一人御呼出にて拝謁仰付られ御菓子賜はる。予ハそれより退出ス。帰宅。鶴子、寿子先在。

*蓄産(畜産) *御弁殿(御便殿)

四月十九日 辛丑 土曜 晴。

来客、日比野氏。

四月二十日 壬寅 日曜 晴。 予記 竹田氏。

午下二時、予、李子と江守氏建築披露園遊会ニ行。余興、能羽衣、小鍛冶 梅若六郎、狂言一人袴、長唄吉原すゝめ、吉原の勢獅子、手子舞、木遣等大せい。園遊会にてにて(衍)六百人の来客と云。実に世の不景色はしらぬものなるか、可驚々々。

四月二十一日 癸卯 月曜 晴。

朝、授業す。本日ハ松島茂房、跡見靖子と結婚披露会。午下三時より美術協会に行て絵画を観る。さて感ずる程の画もなく、四時精養軒に集会ス。智も嫁も来る事遅し。いかゝならむあんし候。漸六時皆集まる。自働車のため延着のよし、大く安心々々。直ニ神前にて結婚の式ありて後、食事開けて新郎其外初対面。媒酌人大東氏の挨拶ありて献杯、万歳を唱ふ。新婦旅装にこしらへて中天停車場に行、九時発汽車にて夫婦めてたく広島に行。大せい見送りて万歳々々、めて度事也。

発信 藤田実子え。中井みとえ。石井初子え。

*中天停車場(中央停車場) *めてたく(目出たく) *めて度(目出度)

四月二十二日 甲辰 火曜 雨。

火曜の稽古する。

四月二十三日 乙巳 水曜 晴。

正午前より田中氏へ行。竹田宮、御容体御険悪の御模様にて、本日あたり御六ツヶ敷からんやと心痛いたしたり。

四月二十四日 丙午 木曜 晴。

今朝新聞にて、愈薨去なる。かなしき限りなし。午下早々、竹田宮御殿に参る。御奥えとの御案内にて、内親王殿下御手つから御顔の御きれを取らせられて、御暇乞をさして戴き、難有さに涙せきあへず感泣いたし、御弔詞申上てまかる。それより北白川宮御殿え参りて御機嫌を伺ひ、閑院宮様え参りて、御息所様拝謁仰付られて、一時間計御咄申上てまかる。中六番町中村元嘉氏を問ふて喪中見舞、しはらくして帰。

四月二十五日 丁未 金曜 晴。

授業例の如し。本日午下一時より校友会員相談会にて三十四、五人来会ス。午下三時より戸崎町出火。折ふし南西風つよく、勿にして大火と相成。裏の川の橋上より蒸気ほんぷをかけて防火に忙殺ス。人々山の如し。五時頃、漸沈火ス。会員も退散ス。祝賀会五月廿五日延期ス。来客、有栖川宮女中美尾の（野）順。

*勿にして（忽にして） *ほんぷ（ポンプ） *美尾の順（美尾野順）

四月二十六日 戊申 土曜 晴。 予記 竹田氏。

近火見舞にて忙殺いたし候。夕景より神代夫婦、泰も来る。夕飯を出す。十時中野え帰。李子、中井貞子遺骨京都え葬ると云。夜七時発二付中天停車場迄見送る。帰途、車引くり返りてかすり傷を受ル。車夫藤ハあばら骨を打、かすり傷を生ス。かち棒折れたり。然しみなさしたる事なくて先々安心々々。

*中天停車場（中央停車場）

四月二十七日 己酉 日曜 晴。

朝より日月会石★（石上卓）揮毫ス。昨日より少々気分あしくて本日清水氏きぬたの開にも断候也。富永発叔氏葬儀、木村氏代理に遣ス。

*石★（石上卓）（石碑）

四月二十八日 庚戌 月曜 晴、風。 予記 竹田氏。

課業例の如し。午下横浜大火、号外。来客、玉枝、閑宮様より御使こう女。

四月二十九日 辛亥 火曜 晴。

火曜稽古する。

四月三十日 壬子 水曜 陰。少し雨ふる。已而晴。 予記 竹田氏。

朝八時出門。江戸川觀世二行。竹田宮恒久王殿下御大葬奉送ス。御いたましの極み也。十時帰。来客、朝鮮福田氏、母と御礼に。

受信 広島松島茂房より。

(五月)

五月一日 癸丑 木曜 先晴。

朝より揮毫ものす。昨夜雨。靖国神社五十年大祭二付休業。来客、中野より正子。夕景、丹羽花子、石山基陽来る。十一日談交社にて予の為に謡会を催す打合せに。

受信 藤井瑞枝より、ふき、山椒の佃煮二曲、外に菓子着。

五月二日 甲寅 金曜 雨。三日月、無月。

課業例の如し。昼比より中野泰来る。大工熊谷呼に遣して画図面にて種々相談する。夜九時頃帰。

発信 藤井瑞枝え返書出ス。

五月三日 乙卯 土曜 晴。

朝、津田より電話かゝりて今朝三時何分か男子★(女+分) 婉、母子共二至而壮健と云。めてたし。橋岡来る。稽古する。

*★(女+分) 婉(一分婉)~ *めてたし(一目出たし)~

五月四日 丙辰 日曜 晴。

朝、本郷憲重来る。午下早々、橋岡来る。李子、静子、寿さまつれて鎌倉橋本氏を問ふ。八時半比帰。

受信 名古屋や日比野より。

*名古屋 (名古屋)

五月五日 丁巳 月曜 晴。

課業例の如し。来客、横浜石川細君、中野泰。

発信 名古屋や中村清、日比のふさ、石井はつ子。

*名古屋 (名古屋) *日比のふさ (日比野ふさ)

五月六日 戊午 火曜 晴。

火曜稽古する。

五月七日 己未 水曜 晴。 予記 休業。竹田氏。

李子、観世二行。元滋氏にわか祝賀会余興に前、蘆刈、菊慈童、仕舞土蛛 (ク) モト定ム。皇太子御成年式あらせられる、(衍) 二付、教職員附添生徒五組二人宛廿人二重橋に奉迎する。

*土蛛モ (土クモ) (土蜘蛛)

五月八日 庚申 木曜 晴。

朝より地袋襖四枚五瑞之図揮毫ス。来客、星野錫細君と指田はる子。

五月九日 辛酉 金曜 晴。 予記 井上角五郎氏より招待、正午十二迄に。

奠都五十年大記念祭二付、両陛下、皇太子殿下、行幸啓あらせられる。三千人来賓、六万余人入場者。予も招待を受たれと、この困雜にては危険と云事にて中止する。正午早々、歌舞妓え行。井上角五郎氏の招によりて。朝、角田栄子来る。

*困雜 (混雜)

五月十日 壬戌 土曜 晴。八十一(度)。風甚。

土井氏の襖揮毫ス。午下二時より宮城へ参る。千種典侍様に御目にかゝりて、坤宮よりいたゞきたる打(一衍)桂、染も仕立も出来上りたるに付、それを着して御札に参る。此桂を千種様より御覧ニ御入に成て、色もよく裏色もよく出来たりとて御褒めを戴、有かたき事也。下りて閑院宮御息所様へ御覧ニ入候。

五月十一日 癸亥 日曜 晴、風甚。八十度。予記 橋岡氏にて謡会。

予、李子と午下一時半より橋岡氏へ行。素謡三時より始り、養老、東北、蘆刈、猩々、雲雀山 花蹊、橋岡。仕舞 花蹊、此服装、坤宮より拝領の拾白重桂にて舞たり 菊慈童。囃子、仕舞等種々ありて、食事済て帰。往の風はけしくて、帰り雨甚し。十日目の雨にて雨喜ひなり。

五月十二日 甲子 月曜 晴。夕景より雨降出したり。60(度)。

昨日に引かへて六十度、寒さ覚ゆ。課業済て襖揮毫落歎ス。それより四時過、津田氏を問ふ。出産之小児をみる。実によき男児にて末たのもしく嬉し。産婦も頗壯健にて夕食を呼れて帰。

*落歎(一落歎)

五月十三日 乙丑 火曜 陰。

火曜稽古する。来客、新田菊、野副とよ。

発信 大宮、中村、中井。石井え。土井え。

五月十四日 丙寅 水曜 晴。

来客、橋岡、石山基陽氏前日の御札に来る。揮毫ものス。午下四時比より、予、李子と堀田様訪問ス。新築之模様拝見ス。夕餐を呼れて帰。

五月十五日 丁卯 木曜 陰。

三島中洲君葬儀二付、木村代理ス。

(五月十六日、記載ナシ)

五月十七日 己巳 土曜 晴。

来客、坊城鉄子、棚橋時子、石井初子。

五月十八日 庚午 日曜 晴。

観世別会能を見る。治子、玉枝を誘ふ。

五月十九日 辛未 月曜 晴。

学校生徒全部遠足会。銚子行。天気頗晴朗。

五月二十日 壬申 火曜 陰。

火曜の稽古する。午下早々より校友相集、祝賀会之役わり名々請持やら諸準備にて中々繁雑を究ム。占灯に退散ス、五十人計。寄宿舎之記念日ニ付晚餐会、余興廿番余もありて済。来客、裏松千代子、武田氏、鳥尾氏、北野元峰師。

*名々(銘々) *究ム(極ム) *占灯(点灯)

五月二十一日 癸酉 水曜 細雨。

朝より時事の大沢、同写真や、大阪新報記者高木讓、時事新報社三浦寅吉、面会ス。十一時より、予、李子、大東、石山、斎藤、中村幸子、長谷川千賀子、志賀鉄千代、上野精養軒に行、廿五日之下見、食事もして、すへて準備する。四時比帰。来客、多豊尾、斎藤菊寿。中野より寿子自賀色紙出来ニ付、八箇持参する。

受信 藤井玉枝より、そら豆着。

*写真や(写真屋)

(五月二十二日、二十三日、記載ナシ)

五月二十四日 丙子 土曜 晴。 予記 竹田氏。

此日、大坂天下茶や寺田善左衛門、服部駒蔵夫婦来着。元下女のまち、子供連て来着。朝

より夜に入ても御祝もの持参の来客つゞき也。

*天下茶や (天下茶屋)

五月二十五日 丁丑 日曜 天晴朗。

上野精養軒に八十祝賀会執行ス。午後一時半集る。余、出席ス。前々よりの準備整ひてすへての裝飾立派也。さしもの此場、実に立錫の地もなき程の、右賓客、中校友、左生徒一千五百名と云。撰待方、夫々の役目の方、美人揃、其奇麗方、実に花の下道の如し。式場二時始。大東氏開会の辞、島田氏花蹊の時歴演舌、生徒一同唱歌花の下みち。名誉校長え、校長え、校友会より進呈物。大隈侯演舌、一木氏演舌、文武大臣其外之祝辞アリて式全畢。続て余興。仕舞高砂、菊慈童、観世家本能土蛛、見事也。次、長唄鏡獅子、伊十郎連にて畢。生徒一同此処にて御弁当、菓子、記念品。校友会、来賓ハ食堂にて食事五百人、実に見事也。御下賜の銀杯にて、大隈侯一同に替りて此御杯にて頂戴。一同花蹊先生万歳三唱。めて度今日の祝賀会畢。

此朝、木津跡見法専来る。

*時歴演舌 (履歴演舌) *観世家本能土蛛 (観世家元能土蛛) *めて度 (目出度)

五月二十六日 戊寅 月曜 晴。

朝より、余、李子と同しく宮内大臣官舎に参る。大臣御不在にて御夫人に御目にかゝりて御賜金の御礼申上る。暫時御咄し申上て帰。島田氏えも訪問す。始に大隈侯に出向、侯に面謁、昨日の御礼申上て種々閑談して帰。増田義一氏にも主人不在にて波江子に逢て帰。此夜、寄宿舎一同より、われ、もゝ子の祝賀会に出席ス。余興もありたり。泰、大工も来りて建築の相談ス。

五月二十七日 己卯 火曜 晴、陰。

火曜稽古する。午前より天下茶や (屋) 寺田氏来る。昼餐を共にす。予、李子と約の如し、不二見町細川別邸にて能をみる。毛利五郎様、広沢氏の小袖會我をみる。囃子三番をみて帰。五時前より華族会館にて綾小路家政子、此度綾小路家督相続人と成られたる其披露会に出席ス。元の公家華族たちにて古しへの心地ス。賓客四十人計にて晚餐会も盛なり。

八時頃帰。元女中まち、家に帰。

*天下茶や (天下茶屋)

五月二十八日 庚辰 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

五月二十九日 辛巳 木曜 晴。

朝より高倉寿子様に参加りて暫時御咄し申上て帰。午下早々、宮城千種任子様御局え参る。両陛下え花の下みち色紙二枚献上ス。千種、正親町様えも。此退出、閑院宮え参り、御息所様拜謁して両陛下え花の下みち色紙献上。夫より皇后太夫大森氏を訪問して御面晤、御夫人にも花の下みちと色紙をさし上而帰。時、土井田鶴子来りて、予、李子、田鶴子と共に西川洋食部行え晚餐を共にす。時、中野より寿子来りて食事を共にす。

五月三十日 壬午 金曜 晴。

課業例の如し。物置の道具一切二楷え上る。大困雑。本郷治子、正子、手伝に来る。正午よりはしめる。十五人手伝にて不残上げたり。時五時過也。来客、神代氏。

発信 京都御寺御所。名古屋や中井みと子。

*二楷 (二階) *名古屋 (名古屋)

五月三十一日 癸未 土曜 晴。

豊陽堂より色紙百組、以前に五拾組、落手。金三百円渡ス。

発信 北条つね子さまえ。

(六月)

六月一日 甲申 日曜 晴。予記 竹田氏、相済。

豊陽堂より上の部十組色紙落手。

六月二日 乙酉 月曜 晴。

課業例の如し。来客、石山すま子、俵松子、夕景より志賀鉄千代、夕飯を共にす。

六月三日 丙戌 火曜 晴。

火曜の稽古する。

六月四日 丁亥 水曜 陰。

朝よりしらへものする。

六月五日 戊子 木曜 雨。 予記 竹田氏。

甘露の雨にて結構いはん方なし。朝九時より築地海事協会物会ニ付水交社に行。婦人部鍋島会長も御出に相成。東伏見宮総裁殿下御臨場にて令旨を賜ふ。理事長湯川元臣奉答、来賓式辞、午餐済て帰。帰途東伏見宮様え参り御機嫌伺て帰。

六月六日 己丑 金曜

本日より建築着手にかゝる。

六月七日 庚寅 土曜 予記 可(ママ)約、横浜茂木氏行。

六月八日 辛卯 日曜 予記 有約、志賀氏行。

(六月九日、記載ナシ)

六月十日 癸巳 火曜 雨。 予記 有約、華族会館行、万里伯の御招待、午下五時。

六月十一日 甲午 水曜 予記 竹田氏、二度。

朝、梶山氏来、地鎮祭を執行ス。此時より心地あしく俄然吐瀉して困む。直に竹田氏を頼む。幸に來りて多量の吐瀉も先々止む。大ゐに心地よし。

六月十二日 乙未 木曜 予記 竹田氏。
臥蓐する。終日なにも食を取らず。

六月十三日 丙申 金曜

臥蓐する。今朝より玄米ソップを食す。来客、中野より正子、津田栄子、治子、神代夫婦。

六月十四日 丁酉 土曜 予記 竹田氏。

臥蓐ス。来客、中島徳蔵。

六月十五日 戊戌 日曜

本日より安全週間執行。メタルを附る。

六月十六日 己亥 月曜

臥蓐。休業ス。

六月十七日 庚子 火曜 晴。 予記 竹田氏。

臥蓐する。火曜会休む。来客、津田栄子、寿子、鶴子、いく子も来る。

六月十八日 辛丑 水曜 先晴。

はしめて床払する。夕景より志賀鉄千代、中村幸子来る。夕餐を共にす。

受信 山形県岡村尚子より桜桃二箱着。

発信 埼玉菖蒲青木百太郎え揮毫断出ス。宮城県佐藤孝助えも。豊後錦織知恂えも。

六月十九日 壬寅 木曜 晴。 予記 竹田氏。

六月二十日 癸卯 金曜 晴。

課業例の如し。梶山氏、清払に来る。

六月二十一日 甲辰 土曜 晴。 予記 竹田氏。

来客、神代郁之進、中島先生。

六月二十二日 乙巳 日曜 雨。

黄梅の雨らしき雨にて可喜。植付も出来るへく候。来客、吉井貞二氏、始而面会ス。吉井小猛の孫。中野電信隊脩業兵。本郷のり重も来りて共に昼飯をする。

受信 藤井瑞枝より、あじの佃煮、梅しそ二曲。

発信 九条様え御返書。

*のり重（憲重）

六月二十三日 丙午 月曜 晴。

課業例の如し。李子、酒匂藤井氏え行。祝賀会之写真出来する。午下雨、後晴。

六月二十四日 丁未 火曜 晴。

火曜稽古する。

六月二十五日 戊申 水曜 晴。

皇后陛下三十六回地久節。朝八時職員生徒一同式場に集ル。君か代奉唱、後校長勅語奉読。李子、皇后陛下の御厚徳を御はなしする。畢而唱歌。式全畢。御祝御膳寄宿舎にて一同昼餐の饗応あり。来客、広島なる松島氏の御姉と稲葉氏細君と来る。始めての事ながら暫時の閑談にて帰らる。

六月二十六日 己酉 木曜 雨。 予記 小松宮頼子殿下五週年祭、朝十時。

朝九時前より小松宮様え参る。この五週年祭ハ御喪中ニ而御内仏にて御仏事行はせられる。それ故御兄弟様、有馬伯御夫婦、若御夫婦、壬生篤子様、松平安藤信昭様、僧侶の読経ありて、後御昼餐をいたゞく。御在世の御事共申上て帰。来客、島田信子、志賀鉄千代、中村幸子三人にて校友会有志より記念書齋建築費として集りたる金七千円也を予に贈られたり。此内三千円ハ祝賀会費に用ひられたり。此日、建築地つきにて廿人計人夫にて大めに賑々し。来客、津田栄子。

*五週年祭（五周年祭） *五週年祭（五周年祭）

六月二十七日 庚戌 金曜 晴。 予記 角田氏百ヶ日。
課業例の如し。 来客、神代夫婦、帰神ニ付暇乞に来る。
受信 広島靖子より文着。

六月二十八日 辛亥 土曜 陰。
朝より揮毫ものにかゝる。 神代、朝八時汽車にて帰。 李子、中夭（央）迄送る。 中島徳
蔵紹介武孫平、絢地菊花賛揮毫ス。

六月二十九日 壬子 日曜 陰。
朝より揮毫ものス。 閑院宮様御使来る。 三条家よりも。

六月三十日 癸丑 月曜 晴。
昨夜大雨覆盆。 課業例の如し。 廿八日講和調印も出来て、明日七月一日祝賀のため一日休
暇を賜る事にて、本日職員生徒式場に集めて国歌をうたふ。 畢而主事、大戦争より今日に
至る迄の大略を伸て式全畢。

発信 秋田千田氏え。 秋元松子え。 中村清子え。

(七月)

七月一日 甲寅 火曜 晴。
講和成立に対する祝賀会日。 休業。

発信 福知山田中作治郎、中井みと子、名古屋新聞。

*名古屋新聞（名古屋新聞）

七月二日 乙卯 水曜 雨。
終日揮毫ものス。 李子、上野、伊藤、中元之買物二行。

七月三日 丙辰 木曜 雨。

終日揮毫ものス。来客沢田正雄。

発信 織田静子え。神代え。横浜渡辺え。

七月四日 丁巳 金曜

課業例の如し。

七月五日 戊午 土曜 晴。85(度)。

揮毫ものス。来客、中野より泰。予、李子と帝劇をみる。

七月六日 己未 日曜 雨。

朝九時より霞ヶ関大谷様盆栽を観る。毎もながら陳列の位置等、盆栽にその台、皆々替りたる、実に雅美可驚歎、ゆる／＼と拝見して帰。

発信 松本市山陰新聞え。万葉友吉え。田中重蔵え。島根県石橋憲一え、絹本ハ返却。

七月七日 庚申 月曜 雨。予記 安藤子爵より午下二時御招待。

午下一時頃より、予、銀を供につれて、光円寺村杉並木安藤様え参る。電車にて水道橋より中野終迄迄にて。夫より車にて行。閑院宮両殿下も始而成らせられる。御建築も立派にて御間取も広く、先々是ならばと殿下も大満足さまにて、御孫様御二方とも大／＼上出来、御側はなれず、お祖父母様によく／＼御なつきにて御可愛事限りなし。御夕餐、結構々々に御相伴申上て七時過帰。

*光円寺(高円寺) *終迄(終点)

七月八日 辛酉 火曜

火曜稽古する。

(七月九日～十三日、記載ナシ)

七月十四日 丁卯 月曜 晴。

午下早々、堀田伯え行。六時頃帰。

(七月十五日、記載ナシ)

七月十六日 己巳 水曜 晴。

朝より高田馬場津田え中元に行。昼飯呼れて中野え行、四時頃迄遊ひて帰。

七月十七日 庚午 木曜 晴。

朝六時半より閑院宮様え参殿。季子女王様御五週年祭典ニ付参拝申上而帰。万里伯。来客、中村よし子。

*五週年祭典 (五週年祭典)

七月十八日 辛未 金曜 晴。85 (度)。

汲泉臨時祝賀号新刊相成候ニ付、予、千種御局迄参りて両陛下献上願上候。此朝、万里伯生徒の授業參觀せられる。

発信 長野吉井え小包ト書状。美の遠藤、大坂石川え。

*美の (美濃)

七月十九日 壬申 土曜 雨。晴雨不定。

揮毫ものス。来客、伊藤歌子、徳子、正子、いく子、堀田伴子様、志賀鉄千代、中村幸子。新潟県佐渡国両津町神原藤左衛門え絹本返却。

(七月二十日、記載ナシ)

七月二十一日 甲戌 月曜 入暑 晴。

午下早々、堀田伯ニ仏教会ニ会ス。六時帰。

七月二十二日 乙亥 火曜 土用二郎 晴。

七月二十三日 丙子 水曜 土用三郎。晴。82（度）。
来客、石井初子。

七月二十四日 丁丑 木曜 土用四郎。晴。

朝八時生徒一同集会。終業式。校長演舌、主事之演舌も有りて無事終業式畢。一人の病人もなく結構々々。来客、秋元寿和子、面談ス。午下四時頃、石山基威電車に危驗なる振舞いたし、口論之上巡查に取てかゝり、交番留置れ、巡查来りておのれに直接談判して、今後右之不仕末なき様とくれ／＼申されて、一先石山氏を帰されたり。

*危驗（危險）

七月二十五日 戊寅 金曜 五郎。晴。82（度）。

終日揮毫ものス。

七月二十六日 己卯 土曜 土用六郎。晴。82（度）。

終日揮毫ものス。夕景一寸雨ふり、已而止。夜中も降りたるよしなからはも小雨にて止たり。

発信 若狭小浜林竹外。名古屋中村清子。織田静、両角源え。

*名古屋（名古屋）

七月二十七日 庚辰 日曜 晴。82（度）。予記 午前六時始、歌仙会、談交会。

朝より北条彝子様を問ふ。御不在中にて御嫁さまに御目にかゝりて暫時御はなしして帰。黒田清暉子と（を）問ふ。不在。渡辺を問ふ。不在。橋岡え行、歌仙会、盛に謡ひ興したる最中にて、午下四時済て帰。戸田極子さま御出に相成たり。玉枝も夜分来る。

七月二十八日 辛巳 月曜 晴。82（度）。

夜より雨ふりたり。

七月二十九日 壬午 火曜 雨。

李子、軽井沢行雨にて中止。朝より風なく大風降しきりたり。是こそ黄金に増る雨なり。

可喜々々。来客、渡辺その。

発信 小包物、みの遠藤、きづ唯専寺、広島松島、天下茶や寺田、其外拾三軒。

*大風一(大雨)一 *みの一(美濃)一 *きづ一(木津)一 *天下茶や一(天下茶屋)一

七月三十日 癸未 水曜 雨。

朝より揮毫ものス。亀二疋買得たり。夜に入て亀にげ出し夜の事にて見当らず。

明治天皇御霊祭。

血のなみたふりそく雨や霊まつり

七月三十一日 甲申 木曜 雨。

先々空晴らしく。早朝より亀さがしたるに漸の事にて風ぬきの処に居たり。可喜。又下部、裏の橋のほとりにて亀の居るを見付て持来る。亀二疋になり可悦。

(八月)

八月一日 乙酉 金曜 雨。

八朔祝日神仏を祭る。揮毫ものス。来客、姉小路伯、夜、本郷憲重。本日諸新聞不残ストライキにて休業。世間闇黒、前代未聞也。

八月二日 丙戌 土曜 雨。

朝九時由島麟祥院二角田氏墓参する。実ニ立派も立派、可驚。此日、七夕祭を墓前にて竹を立て、その為参詣致したるに、常の如くにて墓前に拝したり。やかて帰。此日も晴雨究りなし。天谷氏三十一日午後六時死去のよし端書にて申来る。

七夕や今年ハ墓に竹たて、

*由島一(湯島)一

八月三日 丁亥 日曜

受信 酒匂藤井氏より小包着。

発信 暑気見舞、廿五軒出ス。

八月四日 戊子 月曜 小雨。晴。

天谷氏葬送二付、職員生徒等会送ス。此夕始而新聞発行ス。来客、林里子、中野泰来り、唐橋寿子連て帰る。夕景、雨宮来る、一泊。

受信 神代より素麴着。

発信 暑中見舞、十七軒出ス。

*会送（公葬）

八月五日 己丑 火曜 晴、風。

受信 京万里智子さまより小包着。

（八月六日、七日、記載ナシ）

八月八日 壬辰 金曜 晴。

朝七時半汽車にて、李子、広はし、銀連て軽井沢二行。

朝八時

大正八年八十をかけて米の秋

大正八年八月八日朝八時、八十嬢にみち、三千歳の桃の模様の詩箋にかきて人に分つ、是八枚計。

*広はし（広橋）

八月九日 癸巳 土曜

朝揮毫ものす。昼過後、廣はし寿子、銀と軽井沢より帰。李子、熊谷斎藤氏え行。

*廣はし寿子（廣橋寿子）

八月十日 甲午 日曜 晴。

朝より揮毫ものす。李子、夜十時過熊谷より帰。来客、津田栄子、中野より正子も。

八月十一日 乙未 月曜 晴、雨。

箕作元八先生、伝通院ニ於テ葬式執行。李子会葬ス、朝九時。

小包物出ス、姉小路良子さま、高倉さま、万里智子さま、御寺御所え。

発信 廿四軒え。

八月十二日 丙申 火曜 晴、雨。

朝八時四十分中天停車場え着、津田氏香港より帰朝ニ付、予、李子の迎ひに行。頗無事、可喜。

*中天停車場（中央停車場）

（八月十三日、記載ナシ）

八月十四日 戊戌 木曜 晴。86（度）。

八月十五日 己亥 金曜 晴、小雨。朝、少し強き地震ス。

朝より揮毫ものス。夕五時頃より箕作氏え悔ニ行。御細君にも外皆々さまえ御目にかゝりて、種々御生前の事とも、病中の模様も承り、よほど覚悟もありて、死後の事共御細君え御咄しも有て、始終観音経称られたる様子也。御仏前御花、手桶ニ入て一対、予、李子より供え候。参拝して帰。棚はし氏を問ふ。總子さま不在にて一郎様、登喜子さまと暫時咄して、本郷跡見え寄て夕飯を呼れて帰。高橋捨六氏一週忌ニ付、予の代理李子、玉窓寺に参り八時帰。

*棚はし氏（棚橋氏） *總子さま（絢子さま） *一週忌（一周忌）

八月十六日 庚子 土曜 陰。70（度）。

小雨も少しありたり。来客、宇都美乙女。はじめて七十度の涼しさに皆々庭に出て草取をする。午後三時過、鎌倉橋本氏より縫子電話にて、艶子病よほと重きよし、可成者来てくれと云。李子直ニ仕度して鎌倉ニ出立ス。一泊。四時半電報にてツヤコ遂に死スト云。一同驚々入たり。李子、臨終に間に合はずやと思ふ。此夜一睡のうち、浦つや子、予が枕辺に来る。着物の模様迄分明也。

発信 廿七軒え。

八月十七日 辛丑 日曜 陰。冷氣甚し。

朝八時頃、高橋弘、照子、其妹と来る。不忍之蓮を觀に行て帰るさなり。十一時頃迄種々咄して帰。李子、鎌倉より帰。艶子臨終に逢すとて涙慘然、残念限りなし。今日火葬済して李子帰。

*慘然(漣然)

八月十八日 壬寅 月曜 晴。すし。

午後早々、代々木綾小路氏へ行、大炊御門幾丸侯薨去二付御悔みかてら行。綾小路氏、大炊氏、石山氏も今日只今京都より帰着致され候二付、御悔みのみ申上て帰。裏松氏へ行。千代さま御悦にて種々閑談。夕飯も饗せられてゆるく遊ひて帰。点灯頃也。李子、浦氏通夜する。

八月十九日 癸卯 火曜 晴。

朝より揮毫ものス。裏松氏より電話にて、隣家なる広岡にて、昨夜子息狂人の為に親なる人死に至らしめ、母も共にとて、大騒ぎのよし御しらせに相成、実に驚々入たり。李子、浦氏ニ而通夜する。来客、中野より正子、早苗、津田栄子。

八月二十日 甲辰 水曜 晴。

浦艶子葬儀、此学校門前を通りて暇乞二付みな門前にて見送る。予、李子、直に谷中全生庵ニ参る。会葬ス。十一時済て帰。嗚呼可傷。今朝の新聞にて広岡氏の親殺しの記事出たり。李子、午下より広岡氏え見舞に行。帰るを待て様子を聞たるに、広岡氏ハ赤十字え入院して治療中、また御家内も其見舞にも出られず、李子より家内に赤十字え見舞にやりて、李子留守をする(と)云、然し家内よりの其報を聞かすして帰。

*治療中(治療中)

八月二十一日 乙巳 木曜 晴。

来客、海軍中将男爵梨羽時起君、此度患風と云雑誌新刊二付、予に揮毫もの御依頼に相成

たり。次の間八畳天上（井）出来に相成たり。代々木裏松千代子さま御出にて、久々にてゆる／＼御遊ひの様にて、普請の場所も御みせ申て、其内津田弘視氏も来りて、共に香港、上海之咄しなどにて閑談す。夕飯もさし上て、六時頃御帰りなり。
*天上（天井）

八月二十二日 丙午 金曜 晴。

朝、李子、浦艶子初七日二付全生庵へ参詣ス。電灯や来りて場所治定する。
発信 名古や織田氏え。石井はつ子え。京高倉さまえ。

*電灯や（電灯屋） *名古や（名古屋）

八月二十三日 丁未 土曜 晴。85（度）。

朝、揮毫ものス。

八月二十四日 戊申 日曜 晴。85（度）。

朝、揮毫ものす。西園寺侯、御機嫌よく講和の御大役怠なく済せられ、殊に御健康にて、長々の御苦心も先々程よく満たせられて、歓喜限りなし。可喜々々。午下揮毫ものス。
受信 青木百太郎より梨子着。

八月二十五日 己酉 月曜 晴。暑甚し。

朝、揮毫ものす。夕景より大沢亀子来る。甥の写真持参ス。

八月二十六日 庚戌 火曜 晴。85（度）。

李子、広はし、房州え出立、七時五十分の汽車にて。この朝、浦氏を問ふ。早苗子も滞在中にて霊前に参る。大沢氏持参の写真、早苗子に渡す。土井早苗子と共に私宅へ御出にて揮毫のもの、御札の義にて種々閑談して帰らる。

*広はし（広橋）

八月二十七日 辛亥 水曜 晴。

朝より来客つゞきにて筆もたず。本郷跡見移転払事に下部二人を遣す。

受信 李子より端書着。

八月二十八日 壬子 木曜 三日月。晴。90（度）。

朝よりのこの暑さ堪かねたり。神戸杉山道子え小包もの。名古屋織田静子、御手本二冊。

秋田宮越しま子え。杉山道子え。青木百太郎え。来客、山川房。本日、本郷跡見移転二付、銀と金と手伝に遣す。

*名古屋（名古屋）

八月二十九日 癸丑 金曜 晴。90（度）。

朝、揮毫ものす。跡見のり重氏、駒込え移転二付、下部二人手伝二遣す。夜、堀田伯より、李子明日朝十時四十分発汽車にて二時五十分両国着のよし申来る。夜も八十八度にて睡に就かねる。暑さ甚し。

*跡見のり重（跡見憲重）

八月三十日 甲寅 土曜 晴。90（度）。

朝、大束氏来る。中野泰。午下一時半頃より迎ひの者四人出ス。三時半頃、李子、広はし無事帰京ス。新築食堂先々落成、間の襖はづす。快言へからず。北海道相川氏より材木二枚着。誠に雑材にて先々棚にても出来るか、待たる甲斐なし。

受信 京姉小路さまより小包もの着。

*広はし（広橋）

八月三十一日 乙卯 日曜 晴。

天長節祝日、御四十一廻也。諸払済。

発信 京姉小路え。

（九月）

九月一日 丙辰 月曜 七夕。晴。88（度）。

金五百円也、大工熊谷え費用之内え（ママ）渡ス。

九月二日 丁巳 火曜 晴。90（度）。

朝より役日の天気上々、晴天先有かたし。来客、駒込のり重、今晚より仙台行ニ付暇乞に
来る。此夕、雨宮信来、一泊。

発信 相川え。

*のり重（憲重）

九月三日 戊午 水曜 晴。85（度）。

朝八時より、予、李子、雨宮と上野院展え行、絵画をみる。先々みるへき者は下山観山の
東坡、弥陀来迎の図 木村武山、川端童子の安息也。帰路、駒込林町之跡見氏を問ふ。新
町よりハ少し広く庭もありてよろし。何しろ不潔にて掃除に着か折る。暫時にして帰。

受信 名古屋織田氏より書留着。

*みるへき者（みるへき物） *下山観山（下村観山） *肴（骨）か折る *名

古や（名古屋）

九月四日 己未 木曜 晴。85（度）。

正午より、予、李子、井上、朝倉同行にて帝劇見物す。森律子より招待なり。

女鳴神 村田かく子、一家族

出雲のお国 森律子、よく出来たり

日蓮聖人辻説法 守田勘弥

蘭蝶 勘弥、此糸 浪子、

昼一時より六時畢。

発信 織田氏え。秋元すわえ。

九月五日 庚申 金曜 晴。86（度）。

明日の準備にて塾生も続々帰来る。

受信 中山千代、梨子一籠。

九月六日 辛酉 土曜 晴。86 (度)。

第二学期始業式。朝八時、式場に教職員、生徒集会。校長演舌、主事、長尾氏衛生談もありて、先々病人もなく、よく集りたり。式全畢。時、十時也。

受信 小泉りきより玉子一箱。

発信 名古や織田え。中山ちよ、小泉りきえ。

*名古や (名古屋)

九月七日 壬戌 日曜 85 (度)。

午下揮毫ものス。

訃音、小川直子、小山良吉長男死去。九日葬式。

九月八日 癸亥 月曜 78 (度)。

はしめて秋風らしく覺たり。課業はしむ。来客、志賀鉄千代、久々にて十時頃迄にて帰。土産神社、本年ハ本祭、御輿も出して賑々し。

発信 三重県鈴鹿郡牧田村中川巖え五円小為替返却ス。

*土産神社 (産土神社)

九月九日 甲子 火曜 85 (度)。

来客、長谷川千賀子。揮毫ものス。御輿、神職も御渡り有てわか学校にて昼やすみ有たり。発信 中川巖え画帖返却ス。

九月十日 乙丑 水曜 満月。70 (度)。

朝よりはしめて雨降り出して風もなく、甘露か黄金か天の賜もの、此上なく有かたしとも有かたし。終日静にふり通したり。天を拝す。朝より松平鞆子さま御出にて久々にて正午頃迄御咄しにあきたらす。

九月十一日 丙寅 木曜 雨。70 (度)。

朝より揮毫ものにかゝる。此日も雨静にふりそゞく。秋の雨にて寒く、せるを着てなほ寒く、袷羽織を着る。来客、不破千代子の母茂子、対面す。

訃音、嘉山幹一老母、九日逝去之由、十五日東京にて葬儀執行。

受信 植竹熊治郎より鮎着。

発信 植竹氏え。両角氏え。

*せる(セル)

九月十二日 丁卯 金曜 忒百二十日。雨。先々静なる雨にて無事。

課業例の如し。李子、駒込跡見二行。のり重、明朝仙台より帰京のはつ也。

発信 両角氏え。中川巖え。織田静え。梅若え。

*のり重(憲重) *はつ(笈)

九月十三日 戊辰 土曜 小雨。63(度)。

朝より揮毫ものス。藤井瑞枝絹本、瑞枝の揮毫ふりを写す。午下、雨宮いく子来る。のり

重今朝無事帰京。来客、宇都美氏、斎藤良弼氏。

発信 石井初子え。

*のり重(憲重) *宇都美(内海)氏

九月十四日 己巳 日曜 晴、雨。82(度)。

俄に空晴て残暑むし暑く、また晴雨不定といふ天候也。下婢きみ国元え一週間之願ひにて、今晚の汽車にて出立す。来客、駒込のり重 仙台よりて帰ってきたる、雨宮も。

*のり重(憲重)

九月十五日 庚午 月曜 晴、雨。

晴雨不定、あつき日也。朝、広島人神根愨生 西派僧也、ほのるゝにて佐野川秀子に逢ひて事伝もの届くれられたり。秀子、浅野孝之之妻にて中学校々長のよし。

*ほのるゝ(ホノルル) *ほのるゝ(ホノルル)

九月十六日 辛未 火曜 晴、雨。

火曜稽古始しめする。朝よりむし暑く、又雨ふる。

九月十七日 壬申 水曜 晴、雨。

本日も小雨あり、地方洪水にて日々新聞にてやかまし。布あいホノル、浅野孝之、秀子より写真絵端書等沢山に贈られたり。本日着。

*布あい (ハワイ)

九月十八日 癸酉 木曜 雨。

昨夜よりつゝき雨ふる。

発信 織田静子え。

九月十九日 甲戌 金曜 晴、雨。

朝小雨。課業如例。午下揮毫ものス。

九月二十日 乙亥 土曜 晴。

朝より揮毫ものス。

九月二十一日 丙子 日曜 晴。 予記 梅若祝能行。

正午より、予、李子(と)同しく梅若建築落成祝能を見る。舞台ハ以前之まゝにて惣新築見所もよほど広く、二階の見所もありて立派也。翁 六郎、千歳 万三郎、養老 六郎、外に囃子仕舞等沢山。石橋 万三郎、実に四獅にて此上なき立派也と申。万三郎住居にて休憩ス。奇麗に出来たり。能舞台ながら劇場之感あり。此日の暑氣ハ堪られぬ位也。此夜一時頃、酒井伯より電話にて伯爵逝去申来る。

九月二十二日 丁丑 月曜 晴。

朝より酒井伯に御悔みに参る。伯爵忠興殿に御暇乞申上る。実驚愕之外無之候。暫時にして帰。此夕、津田弘視、香港に出立にニ(衍)付、予、李子と送別ス。七時出発。先無事に出立致し候。来客、吉田若子、母と。

九月二十三日 戊寅 火曜 晴。

火曜之稽古する。夜、明日祖先祭之買物に行。

九月二十四日 己卯 水曜 陰。

祖先祭二付、御宝前清め、神饌を供し、読経拜して後、予、李子、静子、すみ子と共に墓参する。寄宿、先生え晩に御すもしを供養ス。午下雨ふる。

酒井（以下、衍カ）忠興伯薨去申来る。

*墓参（ボ参）

九月二十五日 庚辰 木曜 雨。

朝より揮毫ものス。訃音、正木直彦氏より、中村倭文子永々病氣之処、養生不叶、昨廿三日死去之由申来る。実に驚入の外無之候。

朝（以下、衍カ）、酒井伯邸に行、御暇乞申上候。

九月二十六日 辛巳 金曜 雨。

課業例の如し。午下、酒井伯邸に参拜。御備もの金五円也。三日月不見。三越え染もの依頼ス。

*御備もの（御供もの）

九月二十七日 壬午 土曜 晴。

彼岸日和にてケチガン結構々々。午下五時頃、俄然雲起、驟雨雷鳴、已而晴。

受信 仙台野副より梨子一箱。

*ケチガン（結願）

九月二十八日 癸未 日曜 晴。

朝より彩色もの落製ス。塾生一同植物園に散歩ス。来客、中村ゆき子。

発信 宮城県石越え画出ス。織田静子。

九月二十九日 甲申 月曜 晴。

課業例の如し。

発信 野副氏え返事。

九月三十日 乙酉 火曜 雨。

火曜の稽古する。石山威氏、房州遠足之打合せに行。大酩酊之由、終列車ニ而帰りたるよし也。万里伯、房州より御帰京。李子、万里さまえ行、一泊。雨甚し。

(十月)

十月一日 丙戌 水曜

御所千種典侍様、正親町典侍様より御文、及種々御品ものいたゞく。

十月二日 丁亥 木曜 雨。

十月三日 戊子 金曜 晴。予記 浦艶子五十日祭、午前十一時、全生庵にて。

課業例の如し。午前十一時より浦艶子五十日祭ニ付参詣ス。読経畢而午餐の供養あり。墓参して帰。帰途、酒井忠興伯十日祭ニ付墓参して帰。袷着初る。

十月四日 己丑 土曜 陰。

桜井安芸子え此度結婚御祝を贈る。帝国海事協会湯河元臣殿え大観艦式拝観御断申上る。

発信 織田静子え。両角え請取書。浦五十吉え。

十月五日 庚寅 日曜 雨。

朝より揮毫ものス。

十月六日 辛卯 月曜 陰。

発信 幸島菊子え。返事、宮川照治え。指田春子え。両角え。石井初子え。

十月七日 壬辰 火曜 雨。60(度)。

火曜稽古日にて、雨なから皆々よく御出に打成たり。寒き事、綿入羽織にまだチャタタを

着る。

*打成たり(相成たり)

十月八日 癸巳 水曜 晴。

大快晴。午下より高田馬場津田氏え、栄子十三日出発香港行ニ付暇に行。栄子不在にて已而帰。帰途、松平鞆子さまを訪ふ。暫時にして夕景帰。仲秋十五夜にて月尤清、世界晴と云、珍らし。津田より薄を持って帰。是に庭の紅白萩を添て月に奉る。

十月九日 甲午 木曜 晴。 予記 本日穂積重威氏と桜井安芸子と婚義披露会、帝国ホテルにて。

朝、幸島菊子。辻重四郎、明日米国え出發ニ付暇乞に来る。此度、外務省より労働会義ニ付仰付られたるよし也。予、李子と五時帝国ホテルに行。穂積重威、桜井安芸子と結婚披露会。来客も大勢、貞水の講談、次長唄、畢而食事、実に立派なる事也。九時帰。月清光。

此日、秋元八重子さま中気にて御大病のよし、電話にて申来る。此時、穂積氏結婚に出かけの事にて其まゝにする。

*会義(会議)

十月十日 乙未 金曜 晴。 予記 房州え遠足会、生徒全部を連て。

晴朗。風もなく最上日和也。朝六時半両国出發、始而房州、汽車にて心地よし。十時着。万里伯、栄、桑も御迎ひにて、小松原別荘に着。大歓迎、歓迎門も出来て、総して奇麗にかさり付られたり。女学校加茂氏、葉室伯、渡辺氏をかりて全生徒を入れる。北条之趣一変して見違るほど雑沓を極む。昼食を職員方別荘にて。みな浜え出て此時地引、かますの取立、五百何尾と云、生たるを生徒等にも分つ。此北条始りてより、此奇麗なる生徒の集りたるハ是を始めてと、同所の人々大悦ひなり。二時、全体乗車して帰。此時、雨、夕立模様、雷鳴もあり、さしたる事なく一同無事帰。

此日午後二時四十分、秋元八重子様御死のよし申来る。

十月十一日 丙申 土曜

朝八時、予、李子と同しく秋元子へ行、御暇乞する。もはや御入棺済になりたる事とて残念々々。暫時にして帰。

(十月十二日、記載ナシ)

十月十三日 戊戌 月曜 雨。

課業例の如し。予、李子、秋元子へ行。午後八時、移靈式に参集ス。畢而帰。雨しきり也。

十月十四日 己亥 火曜 晴。

秋元八重子葬儀御執行二付、予、李子と午十二時より谷中祭場に行。一時半より告別式、畢而葬場式、玉串を捧て帰。

(十月十五日、記載ナシ)

十月十六日 辛丑 木曜 晴。

朝八時半汽車にて李子京都へ行。生徒全部家外講儀にて、それ／＼え教員附添にて行。

*家外講儀 (野外講義)

十月十七日 壬寅 金曜 晴。

朝八時半汽車にて津田栄子、弘行、弘英、女中一人連て香港出發二付、東京駅迄見送る。一同大元氣にて出立する。予ハ是より靖国神社能学堂に行、感化院慈善能を見る、玉枝をさそひ朝倉氏と。始、山姥、安宅 六郎、羽衣 觀世、隅田川 野口。切の (ママ) 残して帰。

*能学堂 (能楽堂)

十月十八日 癸卯 土曜 晴。

朝、堀田伯を問ふ。種々咄しの内、田中氏も来られて、とう／＼昼飯を呼れ、二時比帰。

十月十九日 甲子 日曜 晴。

朝より揮毫の心得にて取かゝる。時、石井初子来る。続ひて、弘、正子、また駒込治子も

来りて、昼食など供にして三時過迄。午下五時より北条家に行。氏恭子薨去、御暇乞、外にも皆々申合せて参集。御棺前にて読経して八時帰。来客、高橋弘、正子、治子も、昼飯を共にす。

*と供に (共に)

十月二十日 乙巳 月曜 陰。

課業例の如し。李子、正午東京駅着二付、其心得をする。午後一時、李子無事着。

受信 千田より梨子一箱。蔵之介より青なすとくり着。

発信 織田静え。秋元すわえ。秋元松子え。千田勇子え。斎藤蔵之介え。

*青なす (茄子) *くり (栗)

十月二十一日 丙午 火曜 晴。

火曜の稽古する。

(十月二十二日、記載ナシ)

十月二十三日 戊申 木曜 晴。

皇后陛下より仰付られたる画、秋の草花、漸一枚落製し上る。

十月二十四日 己酉 金曜 雨。 予記 小倉嘉代子と小林正助の結婚披露会、後六日、水交社にて。

課業例の如し。正午過より堀田伯え例会ニ参る。五時より李子同行にて築地水交社に行。小倉嘉代子と小林正助氏結婚披露会ニ会ス。余興も有て中々盛也。九時畢而帰。

号外、海軍大演習、午後三時頃、日向軍艦大爆発起、死傷者も多きよし、いたましき哉。

*六日 (六時)

十月二十五日 庚戌 土曜 雨。

来客、斎藤仁子、夕飯を共にす。高田馬場津田より電話にて、昨廿四日栄子の連一同無事香港着のよし、申来る。

十月二十六日 辛亥 日曜 晴。

朝より揮毫ものス。来客、五島守光子、遠山愛子、小倉敬止。
発信 原町酒井伯え。広島松島え。

十月二十七日 壬子 月曜 晴。

課業例の如し。午下四時より北条子え行、参拝して帰。帰途、秋元子を問ひて、参拝して
帰。講和条約批准の日来る。永久に記念すへき御前会議。

十月二十八日 癸丑 火曜 雨。 予記 秋元八重子廿日祭、午前八時。

火曜の稽古する。本日ハ横浜浜港外にて大観艦式行せられる。あやにく朝より雨ふる。天皇
陛下御親閲あらせられる。来客、上海の大堀伸子。庭師西川留吉来りて庭の手入にかゝる。
李子、鳥尾子え行、学校用品売場之義二付、寄合のよし也。

十月二十九日 甲寅 水曜 陰。

朝より揮毫ものス。朝刊にて昨日の大観艦式も首尾能済せられたるよしにて天地神明に御
礼を申上候。大く安心々々。来客、小林嘉代子結婚の御礼に。

十月三十日 乙卯 木曜 晴。 立派なる晴天。 予記 原町酒井伯四十日祭、午前十一
時。

朝十時より原町酒井様え故忠興様御四十日祭ニ参拝ス。鄭重なる午餐を饗せられる。畢而
御庭の丹鶴を写生する。三時頃帰。中野より泰来りたれとも不逢而帰。

十月三十一日 丙辰 金曜 雨。 真砂会、午後一時。 外務大臣夜会、後九時より。

天長節。嘉辰ニテ午前九時、職員、生徒一同式場に列して君か代唱歌、勅語奉読、主事演
舌ありて相畢。一同え菓子を出す。午下一時より真砂会、学校にて執行。校長演舌、次、
中島徳蔵君、主事、斎藤菊寿、女教員尾田氏、済て真砂会員長唄東八景、次、百面相にて
畢。食事六時過たり。

*東八景（吾妻八景）

(十一月)

十一月一日 丁巳 土曜 晴。

終日揮毫ものス。

十一月二日 戊午 日曜 晴。

終日揮毫ものス。

十一月三日 己未 月曜 晴。 予記 修学旅行。

天気殊晴朗。五時中天停車場に集る。六時四十分発車、全員百十七名也。天気にて一同之悦甚し。午下より少々空曇り出したり。夜、月もよし。白山辺ニ買物に行。

受信 鈴木利右衛門より甘藷二俵着。

*中天停車場(中央停車場)

十一月四日 庚申 火曜 雨。雨終日、夜もふり通したり。

朝、雨にて旅行之人々いかゝとあんじる。火曜の稽古する。

みそきの雨ぬれつゝ秋の参宮哉

香港津田栄子より無事到着の端書着。

受信 もゝ子、伊勢より文着。

発信 両角、中村、藤井、鈴木え。

*当着(到着)

十一月五日 辛酉 水曜 晴。

朝より空晴わたりて旅行よろしからむと。来客、駒込治子、栃木島田政子、梶山氏、井深氏と。高橋、磯貝、付添職員ともゝ子より書至。

十三夜後の月、殊に清光

李子等は今宵都に月やみる

発信 藤井え小包出ス。

十一月六日 壬戌 木曜 雨。 予記 千駄ヶ谷田中氏、断。
朝、雨にて十時頃より空も晴たり。揮毫ものス。横浜佐藤博愛氏御祝ものを贈ル使出ス。
発信 織田静え。

十一月七日 癸亥 金曜 晴。
朝、修学旅行五年生一同無事帰京す。

(十一月八日、九日、記載ナシ)

十一月十日 丙寅 月曜 雨。
課業例の如し。午下五時、佐藤愛子結婚式に付、築地精養軒に行。

十一月十一日 丁卯 火曜 雨。
火曜の稽古する。

十一月十二日 戊辰 水曜 晴らしく。
けふハ晴らしく覺たり。

発信 中村清え。秋元すわえ。大宮尼え。牛込軍人婦人会え断。函館平出氏え。

(十一月十三日、記載ナシ)

十一月十四日 庚午 金曜 雨。
金曜の稽古する。

十一月十五日 辛未 土曜 雨。

十一月十六日 壬申 日曜 晴。

午前十時より芝妙定院ニテ万里小路八重子三十三年、忠房子の御年忌執行。法事済て昼飯を饗せられる。畢而万里小路家二行。四時頃帰。

十一月十七日 癸酉 月曜 雨。

課業例の如し。午下三時より大谷前法主御眼病御全快、其御祝宴を芝紅葉館にて執行。御招きに預りたり。御来客大勢にて六十人余にて御盛会也。始、紅葉館躍、跡、曾我野一行之兵士入隊より除隊まで、後、花嫁早がてんなどにて笑はしたり。十時退散。

*跡(後) *曾我野(迺我野家)

十一月十八日 甲戌 火曜 雨。

火曜稽古する。李子、静子、鷺田菊枝十三回忌法事、芝妙定院にて執行ス。

発信 両角え。名古屋中村、同織田。大宮尼え。宮原え返事。

*名古屋(名古屋)

(十一月十九日、二十日、記載ナシ)

十一月二十一日 丁丑 金曜 晴。

課業例の如し。午下早々、北条氏恭殿三十五日ニ付参詣ス。一同読経を上而畢る。三時より帝劇え行。朝鮮植園之慈善会。予、李子、土井早苗子と同行也。

十一月二十二日 戊寅 土曜 晴。

朝より揮毫ものス。午下、正子、津田の子供四人を連れて来る。日暮帰。来客、角田栄子。

十一月二十三日 己卯 日曜 晴。

新嘗祭卜日曜。朝より揮毫ものス。鉄千代子入来にて孫さまの七五の祝に拵られたる桂をみる。李子ハ百瀬の結婚式、上野精養軒に行。来客、河内長野吉井貞二、此度中野電信隊卒業して来ル三十日除隊ニ付、暇乞に来る。侯爵大炊御門経輝、本月廿一日襲爵被仰付、畏入候。此段御吹聴申上候也。

経輝後見人從三位師前

十一月二十四日 庚辰 月曜 雨。

課業例の如し。午下一時より高木兼寛君の講演及心身修養運動等にて生徒一同練習す。日暮也。

十一月二十五日 辛巳 火曜 陰。

火曜稽古する。

受信 秋元すわ、大宮尼。

発信 石井初え。織田静。両角。

十一月二十六日 壬午 水曜 晴。三日月、尤清く明かなり。

朝九時より車にて九段の鳥やに行き、文鳥一番を迷む、二円也。籠廿銭也。五十銭を預ける。それより野菜物を買に行。太町がよろしといふ。はしめて田町に野菜市をみる。車は入すと云。キャベツの大なるを買て白菜をと思ふ。一ツはうらぬ、またほうれん草を、是も一束うらぬと。いたしかたなくキャベツの大きなを一ツさし上て車夫の通り迄もちゆきたり。人々みな見ていました。静物をととのへて漸作図する。

加藤操、大森宅二と婚約整ひ、廿九日結婚披露会ニ付、祝ものを贈る。

*尤(最) ~ *迷む(求む) ~ *太町(多町) ~ *田町(多町) ~ *入す(いれず)

十一月二十七日 癸未 木曜 雨。予記 秋元八重子様五十日祭なから不参する。

朝より揮毫ものにかゝる。新築庭漸出来したり。夜、近辺野菜買物ニ行。

十一月二十八日 甲申 金曜 晴。

課業例の如し。午下揮毫ものス。

十一月二十九日 乙酉 土曜 晴。

来客、佐藤ちか子、其母と。此度縁談ありて来月二日結婚ニ付、御礼にきたる。午下五時より、予、李子と築地精養軒ニ行。此度加藤為二郎二女操子と大森宅二と結婚披露会にて、

余興も立派、食堂のかさり、総松竹梅に紅葉の大木之下、岐阜提灯種々つりて、頗る花やかなり。十時過畢而帰。

十一月三十日 丙戌 日曜 雨。

朝より揮毫ものス。午下三時、高橋弘、照子、男子**妍婉**。母子共頗健全のよし、めてたし
く。庭師本日にて一先済。

***妍婉**（分婉）

（十二月）

十二月一日 丁亥 月曜 晴。

課業例の如し。午下、揮毫ものス。庭師日より又あらためて仕事にかゝる。

（十二月二日、記載ナシ）

十二月三日 己丑 水曜 晴。

朝より揮毫ものす。午下一時より田沢医博士之新体操、練習も出来て、生徒一同之体操実習あり。博士も来られ、新聞記者大勢来られて、写真も種々撮影ありたり。入沢夫人、松平頼子、島田信子、星野花子、中村よし子、安井氏も。日暮相済たり。跡見のり重来る。

*のり重（憲重）

十二月四日 庚寅 木曜 晴。

朝より揮毫ものにかゝる。下婢きみ、脊中癱出来て宿え下る。李子、万里家二行。

十二月五日 辛卯 金曜 晴。

課業例の如し。午下揮毫ものス。

十二月六日 壬辰 土曜 雨。

揮毫ものす。土井早苗よりの楠八十兵衛材木間屋来りて、エン側の寸尺をたしかめる。雨甚し、夜迄、朝に至るも。跡見治子も。

*エン側（縁側）

十二月七日 癸巳 日曜 晴。十五夜月殊清し。

朝より画揮毫する。来客、閑院宮殿下御使者にて、十四日御誕辰ニ付御招待を賜はる。上海俣野氏、弟山本氏、箕作未亡人。

十二月八日 甲午 月曜 晴。

課業例の如し。揮毫ものす。来客、中野より正子。

十二月九日 乙未 火曜 晴。

火曜の稽古する。午下揮毫ものす。

十二月十日 丙申 水曜 晴。

朝より揮毫もの、静物書上る。

十二月十一日 丁酉 木曜 晴。

朝より揮毫ものす。午下三時より帝国ホテルに行。予、李子と同行。秋元松子と岡本氏との結婚披露会、八時帰。

受信 多田操治より魚味噌漬一桶、渡辺玉子より鮭一尾着。

十二月十二日 戊戌 金曜 晴。

朝より課業午下三時迄、勅題田家早梅、豎詠草、五年生本日書上さす。家の電気、小石川支局え申付たるに、工事半チラケにして、九月より日々電話其外人を遣したるに不来。朝倉さま、遂に電話本局に至りてかけ合。トウ々々人夫来りて尽く電気落成、この悦ひ一方ならぬ。皆々万歳々と祝し候。

十二月十三日 己亥 土曜 雪、雨。

朝、中野泰来る。昼飯を供にす。午下、みそれ又雪、夜に入て雨となる。予、夜十時頃ふるひ出て、足の霜やけいたみ、隣井深氏を呼て診★(言十察)。漸ふるひとまる。けふの冷のひときに障りたるや。

*診★(言十察) (診察) *ひとき(酷)

十二月十四日 庚子 日曜 晴。

朝、竹田氏来る。十一時より閑院宮え参殿。両殿下之御誕辰ニ付被召。御客、三条資君様、千代子さま、黒田御夫婦様、御兄弟様、御子様かた、其外にて三十人計。御培食仰付られ、結構なる御洋食にて、後、支那人の手しな十番面白く、四時頃退散。斎藤良弼氏、近所え移転之由、雨宮申来る。

*御培食(御陪食)

十二月十五日 辛丑 月曜 雨。

朝より歳暮の往来にて終日いそかし。夜、斎藤仁子、良すけ来る。新築を見せる、大悦なり。

*良すけ(良弼)

十二月十六日 壬寅 火曜 晴。

新築、畳入ル、立具も入レル、左官、大工も来りて。今日中出来之見込、大工、左官は。経師も残而落成にいたらす。方々え歳暮品贈るにいそかし。火曜稽古、本納会也。

*本(本日)

十二月十七日 癸卯 水曜 晴。

新築書齋、漸落成にて大く、的いそかしく荷物を入レル。どうなりこうなり来客を入れる事にしたり。予、御用の揮毫ものす。

十二月十八日 甲辰 木曜 晴。

朝、準備して午前十時頃より島田氏、増田氏、原氏、橋本氏、大束氏、石山氏にて学校経

濟之事二付相談。それより大束氏理事を依頼する。午餐を饗応ス。二時過皆帰。此時号外にて、久爾宮邸今晝四時頃御出火にて、御洋館不残炎上のよしにて、予、直に渋谷御殿に参り御見舞申上候。恐れ入たる御惨事也。夕景帰。寺内伯、閑院宮様えも伺て帰。

*久爾宮（久邇宮）

十二月十九日 乙巳 金曜 晴。

学校試験全畢。予ハ御用の揮毫ものス。来客、角田栄子、正子。

十二月二十日 丙午 土曜

朝より御用之画かき上る。閑院宮御使者。

十二月二十一日 丁未 日曜 晴。

御用之画、漸出来、落款も出来て大く安心々々。宮城花松典侍様え使出ス。汲泉五十八号献上ス。本日午後四時帝国ホテル行。藤堂子、小笠原長生君の嬢と結婚式執行。

十二月二十二日 戊申 月曜 晴。

田中氏納会、午前十一時半より。午後五時済て帰。

十二月二十三日 己酉 火曜 よき晴。

朝より浅草観世音え参詣して、中見世金竜山楊枝やにて楊枝沢山買て、帰途、宮師にて御水入、御瓦け、それより本願寺前に神前具種々買、宮内え行。筆及絵具皿、筆泉（洗）、種々買物して帰。一時比帰。来客、鳥尾千世子。

*筆泉（筆洗）

（十二月二十四日〜三十日、記載ナシ）

十二月三十一日 丁巳 水曜

愛知県三浦七右衛門、絹地及（ママ）返却。